[研究発表要旨]

【共同発表】　　**時代に合わせた英語教育のあり方**

佐々木 昌太郎（北海道教育大学函館校）
高橋 陸（北海道教育大学函館校２年）
江畑 諒（北海道教育大学函館校２年）
林 陶子（北海道教育大学函館校２年）
山内 優奈（北海道教育大学函館校２年）
井上 雅道（北海道教育大学函館校２年）

現代の学校教育は、学習指導要領の改訂や技術の発展など、教育の現状を見直したり時代背景が影響したりすることによって、変容し続けている。そこで私たちは、中でも英語教育に注目して、現在とそれ以前との英語教育の変容や、今後予想される英語教育の姿について興味を持った。本プロジェクトの活動としてまずは以下の２点について調査を行うことにした。１つ目、「論理・表現」の導入など、新学習指導要領が改訂されたことに伴い、英語教育における授業や教員・生徒の動向がどのように変化したか。２つ目、近年 AI 機能が英語学習に利用されている事例を踏まえて、英語教育における AI の導入状況や今後の変化・影響についてどのようなものが考えられるか。これらの事柄に関して、地域の中学校・高等学校の英語教員の方々にインタビューを行い、インタビューから得られた情報に関して考察を行った。

**小学校英語教育における明示的指導の重要性**

稲村 拓海（北海道佐呂間高等学校）

はじめにインプット、アウトプットにおける「理解」の可不可と知識の定着のしやすさの関係性を整理し、「明示的学習」と「暗示的学習」双方の重要性を示す。現在の小学校英語教育では、学習指導要領により文法や用法は言語活動の中で繰り返し触れることを通して指導することが示されており、それに則った暗示的な文法指導ばかりが行われている。そこで「明示的学習」と「暗示的学習」のメリットとデメリットを挙げ、現行の授業時数との適合性について考える。それに基づき、小学校英語教育においては明示的な文法指導も効果的に取り入れるべきではないか、またどのように取り入れるべきか、ということを探究する。その上で英語教育の基盤となる小学校段階で習得すべき内容を日英対照言語学的視点から考察していく。また最後にはこれらに関連するような北海道佐呂間高等学校での実践例や取り組みを紹介する。

## ディスコースマーカーによる英文読解 ── 例示に注目した論理展開の理解

鈴木 修平（苫小牧工業高等専門学校）

本研究では、日本人英語学習者がテキスト読解時に論理関係をどのように認識しているかを調査した。まず、Suzuki（2010）の多肢選択式タスクを用いた研究では、日本人英語学習者が例示（general-specific）の関係を因果関係(cause-effect)と誤って認識することが多いことが明らかになっている。この傾向は英語の読解力にかかわらず、上位・中位・下位すべての学習者に見られた。続く調査（Suzuki, 2023）では、複数段落にわたる長文を使用し、多肢選択式タスクを課したが、情報量が増加しても因果関係と例示の混同が見られた。次に、読解中の情報処理プロセスを捉えるため、筆記プロトコル法を用い、英文にある因果関係を示す接続詞を省略し、学習者にその後の内容を推測させた。その結果、読み手は因果関係に基づいて推論を生成することに成功した。さらに、同様に筆記プロトコル法を用い、例示関係を表す接続詞を省略し、学習者にその後の内容を推測させた。今回は、このプロトコル分析をもとに、例示関係の情報処理について議論を行いたい。

## 使役 Have 構文と経験についての認知文法的考察
## ──意図性と潜在的関連性の観点より──

石川 博基（秋田市立御所野学院高等学校）

所有や経験を示す Have に関する先行研究では、事態の参与者間に後述する潜在的関連性（potential relevance）が介在することが明らかにされている。本発表が研究対象とする使役の Have を用いた文（以下「使役 Have 構文」とする）は使役や受益、完了、経験など解釈を複数持ち、同一文が解釈の曖昧性を示す場合もある。本発表は、人が経験を得ようとする、あるいは図らずも経験するという（非）意図性が先の関連性と深く関与すると考える。経験を願望予測し、実現して心的に支配する人の認知特性から、一見恣意的な同構文の解釈へのより自然な説明を試みる。また、同構文ではなぜ依頼概念を言語化し難いか、一時的な使役や映画小説における創作ではなぜ Have を用いるかを経験と意図性の関係から明らかにする。結論として、経験概念を人はどう認識するかという本発表の視点が、非直接的と言われる使役 Have の理解を進めることを主張する。

## to 不定詞主語の文法指導について

佐々木 昌太郎（北海道教育大学函館校）

これまでの言語学における to 不定詞研究の中心は主動詞の後ろに現れる to 不定詞の用法に関するものであり、to 不定詞の主語用法に関する研究は十分には行われてこなかった。このことから英語教育における to 不定詞主語の文法指導においても多くの場合は「to 不定詞は主語として使用可能である」と示すことにとどまっている。本発表では「文末重心」、「典型的機能」、「文脈」の観点から to 不定詞主語構文の文法指導法について論じる。具体的には、「文末重心」の観点から文法指導が行われることで、英語学習者は to 不定詞主語の用法に課される制約について理解し、より体系的に本構文を学ぶことができることを主張する。また、本構文の「典型的機能」と「文脈における談話トピック」の観点から文法指導が行われることで、英語学習者は本構文の存在理由と使用の動機づけを理解した上で本構文を学ぶことができることを主張する。

## 英語と日本語の冠詞体系の発達・未発達はどこからくるのか

濱田 英人（札幌大学）

認知科学では、知覚・認識された事物は話し手、聞き手と発話の場面からなるグラウンドと結びつけられることで意味をなすと考える。時制と法が事態を認識論的にグラウンドし、名詞では定/不定を特定することがグラウンドすることになる。このグラウンディングはすべての言語に共通する認知の仕組みであるが、名詞のグラウンディング要素に関しては、英語には冠詞(a/the)があるが日本語にはそれに対応するものが存在しない。

本発表では、冠詞の発達・未発達の問題を言語話者の事物の認識の在り様から考察し、モノの概念形成は概念化者と認知の場の中で概念として確立するものであることから、知覚と認識が融合した認知では冠詞は必要なく、脳内で客体化して認識する認知の場合には言語コミュニケーション上の混乱の回避から冠詞が発達していることを主張する。また、この 2 つの認知様式の違いが言語の語順に反映することから、冠詞の発達・未発達は SVO 言語と SOV 言語の一般的特徴であることを述べる。